
テラース・スティア

山石木一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テラーズ・ステイア

【Nコード】

N4824V

【作者名】

山石木一

【あらすじ】

帝暦二千五十年、世界には人型兵器が存在していた。

TS、テラーズ・ステイア。

身長数メートルの人型兵器。

背中、足に取り付けられた推進装置により、優れた機動性を発揮し、その大きさに見合った高火力の武器を操る地上兵器である。

地上兵器とはいえ、ブーストすれば地上から数十メートルも飛び上がることが出来るのであるから、その機動性は他の地上兵器を圧倒しているといえよう。

胸部に設置されたコクピットにあるレバーによって手足を、関節の一つに至るまで人間の体と同じように動かすことが出来る。

手で物を自在に掴むことも可能。その足で、ほぼ全ての地形で戦闘能力を発揮する。

そんな夢の様な兵器が存在していた。敵を駆逐するために。

パイロットたちはTSを操り、敵のTSを撃墜することを使命としている。腕を上げ、多くの敵を撃墜すれば報酬がもらえ、部隊での地位も向上した。

彼らは、戦うことが好きなのだ。

そして、その度合いが強い者が、エースパイロットと呼ばれるのである。

インシュヴァルツ。

彼もその中の一人であった。

1（前書き）

私が書いている二次創作の主人公と名前は同じですがまったく関係ありません

ただ考えるのがめんどろっだっ（ry

帝曆二千五十年、世界には人型兵器が存在していた。

TS、テラーズ・スティア。

身長数メートルの人型兵器。

背中、足に取り付けられた推進装置により、優れた機動性を発揮し、その大きさに見合った高火力の武器を操る地上兵器である。

地上兵器とはいえ、ブーストすれば地上から数十メートルも飛び上がる事が出来るのであるから、その機動性は他の地上兵器を圧倒しているといえよう。

胸部に設置されたコクピットにあるレバーによって手足を、関節の一つに至るまで人間の体と同じように動かすことが出来る。

手で物を自在に掴むことも可能。その足で、ほぼ全ての地形で戦闘能力を発揮する。

そんな夢の様な兵器が存在していた。敵を駆逐するために。

パイロットたちはTSを操り、敵のTSを撃墜することを使命としている。腕を上げ、多くの敵を撃墜すれば報酬がもらえ、部隊での地位も向上した。

彼らは、戦うことが好きなのだ。

そして、その度合いが強い者が、エースパイロットと呼ばれるのである。

インシュヴァルツ。

彼もその中の一人であった。

ピピピピ

耳にアラーム音が届く。敵に機体をロックされた証拠だ。同じ場所に立ったままでは、相手の射撃武器により蜂の巣にされてしまうだろう。だが、こんなところで敵に撃墜されるわけにはいかない。

それは、味方の敗北を意味する。

味方が何機残っているのかは分からないが、一機落とされることは大きな損害になる。

性能がそう変わらない強力な兵器による戦闘は、一つの数の差が勝敗を分けることもあるのだ。

インシュヴァルツは両手で掴んでいるレバーをすぐさま前に倒し、ブーストペダルを踏む。それに伴って機体の背中に付いている推進装置から青い光が放出され、機体は一気に加速し、その体を岩場に隠した。

その瞬間、さっきまでインシュヴァルツがいた場所を、無数の弾丸が貫いていく。フルオートの100mmマシンガンだろうか。

一発一発の威力は少ないとはいえ、あの量の弾丸をくれば命は無い。

インシュヴァルツが今操っている機体、TS-14（エルシアス）は、そもそもが超高速戦闘用の格闘機だ。

その抜群の機動性を活かして敵に突っ込み、高威力の格闘武器と近接用の射撃武器を使い、ヒットアンドアウェーを繰り返すのが通常の戦闘法だ。

ただ、その機動性故に防御力がかなり低い。極限まで装甲を減らして、機体を軽くしているためだ。

勝つためには、撃ち合いをしてはいけない。一瞬、一撃で勝負を決めなければならぬだろう。

そして、刹那にして決着が付くこの戦闘において頼りにできるのは、いままで自分が培ってきた技術と反射神経だけだ。

まだアラーム音は鳴り響いている。例え敵の視界から消えたとしても、ロックが外れるわけではない。相手も素人ではないのだ。次の攻撃のタイミングを探っているはずである。

インシュヴァルツは機体を反転させ、敵がいる方向に持っている武器を向ける。レーダーに映っている敵機は一機。一対一でいられる間に決着を付けるべきだろう。

硬直状態が続く。

しかし慎重にならざるを得ないのだ。もし何の策もなしに飛び出した瞬間、待ち構えていたように弾が襲ってくる可能性もある。

だからといって待っているだけでは、捨て身の突撃をされてもおかしうはない。その場合も、自分の行動が遅れた場合、ジ・エンドだ。

インシュヴァルツはちらとモニタを見て、残弾を確認した。大丈夫。まだ十分残っている。

「さてと、やりですか」

口元に垂れてきた汗を下で舐め取り、インシュヴァルツは薄く笑みを浮かべた。

次の一瞬で勝負は決する。自分が勝つか、相手が勝つかの違いだけだ。

ガン。

インシュヴァルツは、レバーを力強く右に倒し、ブーストレバーを踏みつけた。岩場に隠れていた機体がそのまま右にスライドし、敵の射線に姿を晒す。

相手の真紅の機体、TS-8（レイオン）の光る双眸が笑ったような気がした。無論そんなことはありえない。あれはTSのメインカメラ。モニターに周囲の景色を映し出し、パイロットの視界を確保するためのただの機械だ。

それなのにそう感じられたのは、相手が勝ったと確信したことをインシュヴァルツが分かっていたからか。だから機械が笑ったように見えたのかもしれない。パイロット笑みがTSの目に反映されたかのように。

レイオンが持つマシンガンから、空薬莖が次々と飛び出した。ほぼ同時に飛び出した数十の弾丸が、エルシアスに襲い掛かる。

フルオートで弾を撃ち尽くして、レイオンの動きが止まった。いや、弾が無くなったから止まったのではない。恐らくパイロットが啞然としたのだろう。インシュヴァルツが取った行動に。それから自分の攻撃が当たらなかったことに。

インシュヴァルツはブーストレバーを踏んだまま、機体が岩場から出た瞬間にレバーを左に押し返したのだ。岩場から出た機体は、その推進力を余すところ無く活かし、高速でもといった場所に帰ったことになる。まさにエルシアスの機動性あつての芸当だった。

相手からは、エルシアスが出てきた瞬間消えたように見えたことだろう。

その、一瞬の逡巡が命取りとなった。

エルシアスは今度こそ敵の機体、レイオンの前へと躍り出た。慌てて空になったマガジンを交換しようと敵が動いたとき、その体に十数発の弾丸が命中する。

64mm近接用機銃。牽制用の銃であるため、相手が持っているマシンガンよりも貫通力も威力も低い。レイオンの厚い装甲の前では、効果的なダメージを加えることは難しい。

だが、それでいいのだ。ダメージを与えるための射撃ではない。目的は別にあつた。例えばダメージを与えられなくとも、命中したときの衝撃は発生する。

弾が当たり、敵の機体がわずかに体勢を崩す。

だが、インシュヴァルツにとってはそれで十分だった。

機銃を地面に投げ捨て、腰に備え付けられているビームソードを抜く。射撃武器での戦闘では相手に当てるのが難しい武器だが、当たったときのダメージはマシンガンなどとは比べ物にならない。大口径のカノン砲が命中したときと同程度のダメージを与えることができるのだ。

ブン、という音がして、青い光が柄から飛び出す。

背中ブースト装置が最大出力で動き、爆発的な推進力が生まれる。エルシアスがレイオンへと襲い掛かるスピードは並大抵のものではない。

レイオンの前で、ビームソードが振り上げられた。最後の抵抗か、機体頭部の前に敵は手をかざす。

しかし、そんなものに意味はない。

高エネルギーによって作られたビームソードが、その腕ごと敵の機体を貫いた。頭部からコクピットがある胸部までが一瞬で切り裂かれる。

インシュヴァルツは瞬時にその場から離脱した。

直後、すさまじい音が轟く。

敵の機体が爆発したのだ。

インシュヴァルツの口にふつ、と笑みが浮かぶ。

勝った。それを実感したとき、達成感が込み上げてくる。

その感情を胸に昂ぶらせたまま、インシュヴァルツは機体を翻した。敵だったものの残骸には目もくれず。

ふー、と息を吐きながら、紋白直孝は大型カプセル（・・・）型筐体の中で大きく背伸びをした。

目の前には百八十度以上の全天モニタ。レバーが二本に、それぞれに四つずつボタンが付いている。足元には二つのペダル。

直孝はハッチを手で押して開き、外に出た。途端につんざくような大きな音が直孝の耳に届く。様々なゲームの効果音やBGMだ。

直孝は、ICカードを外にある機械に通す。ポン、という効果音が流れ、タッチパネルに先の戦闘での戦績が表示された。

倒した相手、パイロットネーム モック は、十万人を超えるプレイヤーたちの中で、全国ランキング八十九位という、いわゆるランカーと呼ばれる類のプレイヤーである。

必然的に、このゲームのプレイ時間はかなりのものになっているはずだ。そうでなければランキング上位に位置するのは難しい。

テラース・スティア。

三年前にゲームセンターに登場したアーケードゲームである。製作会社は国内のゲーム会社、プレデクト。

二足歩行の人型兵器を操り、敵を倒す、というのがこのゲームの主旨だ。

この中には二つの勢力が存在し、自分と違う勢力に所属している機体が敵。敵味方の判断基準は至ってシンプルである。

プレイヤーは筐体の中にプレイ料金を投入し、五十箇所以上ある戦闘区域から一つの地域を選び、そこで戦闘を開始する。

プレイ料金は百円。これで一ゲームのプレイが可能だ。これだけのゲームを動かせるほどの回線を使っているなら、その通信費だけでかなりの金額を必要とするはずなのだが、このゲームは安い。それこそが、今のゲームセンターでの筆頭人気ゲームたる理由の一つであろう。

戦闘開始した区域にいる味方と協力し合い、敵を倒すのだが、さっきの直孝のように人がほとんどいないときもある。

普通はシステムが勝手にプレイヤーを振り分け、五対五で組まれる戦闘だが、誰ともマッチングしない場合はプログラムが動かすパイロットと戦うことになる。そこで勝利してもプレイヤーデータに何か加算されるわけでもなく、正直なところ金の無駄遣いだ。

まだ、一人人間のパイロットがいただけマシと言えるだろう。

だが、直孝が敵と遭遇しにくい理由はもう一つある。

ゲームが登場してからもう三年。人気ゲームであるがゆえに、未だ新規プレイヤーは後を立たない。しかし彼らとランカークラスのプレイヤーと一緒に戦わせるわけにはいかない。プレイヤーのレベルが違いすぎる。

だから、クラスというものが作られている。

これは、プレイヤーの撃墜ポイントというもので決められるのだが、今のところクラスは全部で五つ。

撃墜ポイントが0から999、1000から2999、3000から4999、5000から9999、10000以上。

この五つである。

直孝が所属しているのは一番上、撃墜ポイント10000以上のクラス。このクラスに所属しているのは、全国でも上から百人程度だ。

直孝のパイロットネームは、インシュヴァルツ。全国ランキング八位。ランカーの中のランカーである。

ランキングもそこまでくれば、ある程度の上層プレイヤーならば知らないものがないほどの有名プレイヤーになる。だが、彼をそこまで有名にしている理由は、八位というランキングだけではない。もう一つ要因がある。

話は変わるが、このゲームでの撃墜ポイントというのは、撃墜した機体の数から、敵に撃墜された数を引いた数字がそれになる。

例えばモックなどは、20000機程度撃墜しているが、その約

半分の10000回くらい撃墜されているのだろ。つまり撃墜ポイントとは10000ちよつとだ。

そしてインシュヴァルツの撃墜ポイントは約24000。そして驚くべきは彼が26000機しか撃墜していないことだ。

つまり、撃墜されたのはたったの2000回。撃墜した数のわずかに十二分の一なのだ。その脅威の生存率こそが、撃墜ポイントでは全国八位であるものの、インシュヴァルツが最強のランカーではないかとまで噂されている所以である。

ピ、という音がして、データを書き込み終わったICカードが排出されてきた。直孝はそれを取り、カードケースに収める。

すでに時刻は八時を回っている。今日はそろそろ潮時だろう。一人暮らしをしている直孝は、何時に帰ろうと怒られることは無い。だが、稼いでいるバイト代にも限りがある。いくらこのゲームが安いとはいえ、程度は考えるべきだ。

直孝は家に帰ることを決め、ゲームセンターの自動ドアを潜り抜けた。

歩き始めた直孝の足に、突然振動が伝わった。制服のズボンの右ポケットに入れている携帯のバイブレーターである。

直孝はポケットに手をつ込み、中から携帯を取り出した。外側のサブディスプレイを見ると、メール着信一件 と表示されている。

開閉式の携帯を開き、メインディスプレイを露出させる。携帯を操作し、着信メールボックスを開いた直孝は、見慣れないメールアドレスに首をひねった。だがその件名から、そのメールがどこから来たかを理解する。

テラース・ステシア全国大会のお知らせ

直孝は、テラース・ステシアの携帯サイトにも登録している。普通、アーケードゲームの携帯サイトというのは、月額料金が発生する。

しかしこのゲームの携帯サイトはどういうわけか完全無料である。ポケット代はもちろんかかるが、それにしてもプレイ料金は安く、こんなサービスまで行っていて利益が出るのだろうか？

そんな疑問を抱きながらも直孝はメールを開き、内容を確認した。

日頃、テラース・ステシアをプレイしていただき、真にありがとうございます。近日開かれるテラース・ステシアの全国大会の出場選手候補の方に、メールをお送りしております。パイロットネームインシュヴァルツ様は、そのランキングにより、全国大会出場の権利を手にしておられるため、招待メールを送らせていただきました。大会に参加される場合は、下記のURLより参加申込をなさるよう、お願いいたします

メールの下の方にはメールの内容通り参加申込のページへと飛ぶのであるリンクが貼り付けてあった。

全国大会。そんな大会が開かれるのは、このテラース・ステシア

というゲームが世に出てから初めてのことである。

逆に言えば、これだけの人気を誇っているにもかかわらず全国の頂点を決めるイベントを行わないゲームというのは珍しかった。ユーザーからの要望が多くて開催することになったのか、運営が自分たちで開催すると決めたのかは分からないが。

どのようなものは分からないが、ランキングで出場選手を決めるなら、全国でも腕のいいプレイヤーばかりが集まるのだろう。

中にはそのプレイ回数故にランキング上位にいるだけの下手なプレイヤーもいるが、全国百位以内のランカーたちは、ほとんど皆実力ある強敵である。

開催場所は直孝が住んでいるこの国、彩櫻国の首都櫻都の中、海に面したとあるイベント会場とある。櫻都に住んでいる直孝にとっては別に遠くも無く、簡単に行ける場所であるし、さらに上位入賞者には豪華プレゼントとあつては、興味がそえられるのも仕方ない。考えられるとすれば、限定機体や、武装など。

コアなゲームプレイヤーなんてものは限定と名の付くものに弱い。直孝とて例外ではなかった。そんな全国で限られたプレイヤーしか手に入れることのできない機体や武装があるのだとしたら、何としても手に入れたい。

そう長くは考えなかった。直孝の指は、滑るようにボタンを操作し、リンクを押すと参加受付サイトに飛んでいた。

ICカードに印字されている番号を打ち込むと、パイロットネームの欄にインシュヴァルツと表示される。次に、メールに書いてあった暗証番号を打ち込み、自分に大会の参加権利があることを示す。最後に、参加しますか と書かれている場所に、YesとNoのボタンが現れる。

直孝は迷わずYesを押した。

直後、直孝の携帯にもう一度メールが届く。大会に出場することが決まったという確認メールだ。同時に大会当日、出場者であることとの証明にもなってくれるようだが。

全国大会の日時は来週の土曜日に開催されるらしい。どうにも急な話だと思うが、コアなプレイヤーならそれでも予定を合わせるのだろう。仕事が入っている人間は有給でも何でも取って。

高校生である直孝は、土曜日は問答無用で学校は休み。部活にも入っていないし、彼女もない身とあっては、休みの日にどこかに行くわけでもない。どうせバイトで貯めた金でゲームをしているだけである。

大会ではプレイ料金は発生せず、参加料も必要無いということだから、生活費を気にする必要も無い。

やるからには優勝を目指す、負けたところでペナルティがあるわけでもない。

自分のアパートが見えてきて、直孝は携帯を閉じた。

ジリリリリ

耳をつんざくようなベルの音で、直孝は目を覚ました。まだはつきりしていない頭で、うるさい目覚まし時計を止める。

朝。学校という名の代わり映えのしない日常がその鎌首をもたげてくる時間である。

それを頭が認識したあたりで、やっと意識が覚醒してきた。

とはいえ、学校も嫌なことばかりではない。友達と駄弁ったり、今しか出来ないバカをする。代わり映えの無い出来事でも、楽しいと感じる瞬間は多い。

さて、あまりうかうかしてもいられない。直孝の学校はとりわけ生徒指導に厳しいという訳ではないが、遅刻したときのペナルティとしてトイレ掃除というものがある。これはどうにもめんどくさい。下手すれば何時間かかる重労働である。バイトで同じことをしたら自給いくらと金がもらえるのに対し、こっちは完全無料奉仕。割に合わない。

そんな事態は願い下げである。

まあ、今は七時。始業の八時半まではまだ十分時間がある。二度寝しない限りは遅刻することも無いだろう。

直孝はパジャマを脱ぐと、手早く制服に着替えた。夏休みが終わり、そろそろ秋になるうかという時期なのだが、外はまだ暑い。制服も上は白いシャツ、下は紺色の薄い長ズボンという夏服である。

寝癖が付いている髪を手でくしゃくしゃとかき回しながら、直孝は食パンをトースターに入れる。

急いでいても朝食は抜きたくないというのが直孝の信条である。何も食わずに学校に行ったら、授業は眠いわ、腹は減るわ、何もする気がなくなるわと負の連鎖に巻き込まれてしまう。

たかが食パン一切れ、されど食パン一切れである。

ものの数分で朝食を食べ終わり、パンを乗せていた皿を流しに放り込むと、直孝は家を後にした。

アパート一階の自転車置き場の中から銀色のマウンテンバイクを引っ張り出し、前輪にかけていた鍵を外す。

学校まではこの自転車で十五分程度。約五キロといったところだろうか。そう遠くない場所にある。直孝はサドルにまたがり、ペダルを踏みつけた。

軽快に道を走り、徒歩通学の生徒を追い抜いていると、前方で手を振っている男子生徒がいる。おい、などと手を振りながら、直孝にその存在をアピールしている彼の横を――

爽快さと共に追い抜いてやった。

「おい、ちよつと待てよ！」

後ろからかけられた非難めいた声に、仕方なくブレーキをかけて自転車を止めてやった。わざわざ引き返すことはないが。

男子生徒と直孝の自転車の間に開いた数百メートルの距離をその男子生徒は走ってきた。

憐れみの情はない。なにせそういう奴である。

舌を向いて息を切らしているその男に直孝は声をかけた。

「どうしたんだ？ 中西」

「どうしたじゃ……」

何かを言おうとした途中で咳き込む中西。

中西亮。なかにしりょう直孝と同じ二年C組のクラスメイトである。彼を一言で表すいい言葉がある。

お調子者。

中西はその言葉の体現者と言っても過言ではないだろう。

休憩時間から授業中に至るまで、常に喋っている印象しかない。止まると死んでしまう回遊魚かと問いたいところなのだが、これが弄ると面白い。直孝や、クラスの生徒の一部は中西のリアクションにいつも笑い転げている。

「弄られてるんですか!？」

心の声が漏れていたようだが気にするまい。あくまで事実を言ったまでのこと。こいつのことだ。どうせ五分もすれば忘れるだろう。「で、何だ？ 呼び止めるような用でもあるのか？」

「実は面白いこと考えたんだよー」

ろくな事でないことはよく分かる。だが、聞いてみなければ始まらない。それで、と先を促す。

よく聞けよー、紋白。そんな前置きと共に中西は言った。いや、声の大きさを鑑みるに叫んだと形容する方が正しいのだろうか。

「杉原の女らしさの無さをからかってやろうぜ！」

突如、中西の体が吹っ飛んだ。

舗装されたコンクリートの道路を二転三転して、最後はブロック塀にぶつかる。場合によっては大怪我をしてもおかしくない吹っ飛び方だったか――

「まあ、中西なら大丈夫だろう」

直孝はうんうん、と頷きながらたった今中西の頬に素晴らしいストリートパンチを食らわせた張本人の方へ振り向く。

杉原結希^{すきはらゆき}。意志の強そうな瞳に、固く結ばれた口元。長めのライトブラウンの髪をポニーテールにまとめている彼女の顔は、どう見ても怒っていた。

当たり前だ。中西のデリカシーの欠片もない発言を聞いたら誰だって怒りを覚える。一年以上奴との付き合いがある直孝でさえときたま殴り飛ばしそうになるというのに、年頃の女の子が女らしくないなどと言われたらそりゃあ激怒することだろう。

だが、今回に限っては――

「ある意味事実なんだけどな」

「何か言った？」

ぽつりと放った俺の呟きは、どういうわけか彼女の耳に入っただしい。目の中で炎でも燃えているんじゃないかと疑うような強い視線が直孝を射抜く。

これが、ある意味事実だと直孝が呟いた理由だ。男勝りで男より

も強い少女が果たして女らしいと言えるのかどうか。

喧嘩していた男共をその拳で黙らせ、スポーツでは男以上に活躍し、馬鹿なことを言った中西を吹っ飛ばしたりと。

しかも女子剣道部の主将も務めていたような気もする。

それでも顔に釣られて彼女にアタックする男は少ない。だが、今まで彼女に言い寄った男は例外なくさっきの中西と同じ道を辿ってしまった。ご愁傷様としか言いようがない。

吹っ飛んでいった中西は視界から取り除き、直孝は結希に話しかけた。

「お前にしては遅い登校だな」

このままいけば、始業の二十分くらい前には学校に付く。だが、いつもの彼女なら部活の朝練で、この一時間前には学校に登校しているはずだ。それを考えるとかなり遅い登校ではないだろうか。

「どうしたんだ？」

疑問に思った直孝がそう聞くと、結希はこれ見よがしにはあ、と大きくため息を付く。さすがに目の前でそういう行動を取られると直孝とて腹が立つ。

「なんだよ、俺が何かしたかよ？」

「まったくあんたは……。今日、模試があるの忘れてたわけ？」

「ああ……そういえば……」

結希に言われて気が付いた。そうだった。今日は終日、模擬試験だ。

直孝たちももう高校二年。決して全員というわけではないが、進学を志す者が多いこの学校で、入試のための試験は度々行われる。

そんな直孝を見ながら結希はまたため息を付いた。

「勉強せずにゲームばかりかしていても学年上位の点数が取れるあんたとは違いますからね。夜まで勉強してやっとそこその点が取れるのよ、私は」

口を尖らせて言ってきた結希に、直孝は少し眉を寄せながら言う。「なんとも嫌味な言い方だな」

「そりゃ嫌味だからね」

どうやら冗談ではなかったらしい。彼女の言葉と同時に拳が飛んできて、直孝の頭をポカリと殴った。

手加減はしているのだろうが、地味に痛い。

よくよく考えると自分は何も悪いことはしていない気がするのだが、と直孝は抗議したのだが、当然聞き入れられるわけも無く。

「じゃあ、あたし先行ってるから。その馬鹿、ちゃんと引っ張ってきなさいよ！」

結希はそう言つと、じゃあね、と直孝に向かって手を振り、すたと学校の方へ歩いていつてしまった。

直孝は仕方なくブロック塀にもたれかかったまま伸びきっているその馬鹿のところに向かう。

「生きてるかー？」

「うひゃあ!？」

耳元で大声を出してやると、中西は奇声を上げながら飛び上がった。

きよろきよろと辺りを見渡した後、彼は直孝の顔を視界に入れる。

「あいつは……？」

「もう学校行ったよ」

俺の言葉を聞いた中西は一瞬安堵の表情を浮かべると、肩をすくめた。

「まさかあいつが近くにいたとは思わなかったよ……。いいアイデア思いついたんだけどなあ」

「お前、いつも同じようなことしてるじゃないか」

その度に結希に吹っ飛ばされているにも関わらず懲りない奴である。

中西は、まあいいや、と言いつつ鞆を拾い上げると、制服とズボンに付いた埃をはらい、学校に向かって歩き出した。

「行こうぜ紋白。のんびりしてると遅刻するしさ」

「ああ、そつだな」

直孝は軽く相槌をうち、すぐそこに停めておいた自転車にまたがった。中西を見ながら、軽く手を上げる。

「じゃな」

同時に思いっきりペダルを踏みこんだ。今度こそ後ろから聞こえてくる、待ってくれー、という悲痛な声は無視する。

すでに通学路に生徒の姿は無い。始業時間まで残り五分を切っている。無駄な所で時間を使ったせいで遅刻しそうだ。

自転車のギアを上げ、直孝は自転車をさらに加速させた。全速力で道を走りぬけ、何とか始業のベルが鳴る前に学校の敷地に滑り込んだ。

中西が学校に遅れたことは、言うまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4824v/>

テラース・スティア

2011年8月14日03時31分発行